

句集

夏
帽
子

西
村
宏
虎

每日句会入選句

添書きに辛苦見えたる年賀状
連鎖せる不満の愚痴や女正月
雪見酒して至福なる露天風呂
黒潮へ絶壁なせる水仙卿
どんどの火果てて小暗き神の庭

老いらくの恋など期待初みくじ

屠蘇祝ふダイヤ婚なる共白髪

鱒酒に酔ひて毒舌はばかり

たあいなき話肴におでん酒

花街の昼は閑なり路地小春

日向ぼこ猫が隣でいびきかく

枯蘆や遊里の昔語り草

湯豆腐に六腑ほぐるる酒の酔

石庭の波の箒目紅葉散る

縄のれん分けて仰げば冬の月

水底に煌めく溪の散紅葉
木の葉髪持ち上げられぬ力石
峡の日の照り翳りなす紅葉狩
山上の古刹の殊に紅葉濃し
トンネルを抜けて展けし豊の秋

木の実落つ城の二の丸三の丸
運動会招待席に忘れ杖

武蔵坊少し痩せしと菊足しぬ

無住寺の古りし蹲踞小鳥来る

松籟かはた潮騒か寝待月

百体の案山子が守る千枚田
鬼やんま竹馬の友を思ひけり
落つる日に茜を染むる鰯雲
満天の星に安堵や台風過
高鳴れる水の匂ひに稲実る

起伏野の続く限りに蕎麦の花
朝市に並ぶ露けき野菜かな
竹春の嵯峨野を駈けて人力車
山泊まり闇の深さに銀河濃し
宿下駄で外湯巡りす星月夜

カンナ燃ゆ男にもある嫉妬心
島の宿降り注ぐごと天の川
番犬も顎だして臥す油照
蝉時雨村に一軒何でも屋
夕焼けて金波銀波の琵琶湖かな

みかづきへ千手拵げし大枯木

飛鳥路や秋寂ぶ謎の石めぐる

島山の全山染めて青蜜柑

花八つ手目隠しなせる外厠

フェリーー待つ棧橋の沖跳ねる

修験者の錫杖ひびく秋山路

核心の話に止まる扇かな

黄昏て銀の波打つ芒原

山襖くつきり見せて月今宵

峡の宿庭下駄露を置きにけり

秋風裡謎を秘めたる古墳訪ふ
ビル街の細き辻裏地蔵盆
赤とんぼ乱舞す谷戸の中空に
新涼や魚板を打てば音澄める
暗闇にどよめく声や大文字

と見る間に甲山失す大夕立
夏帽子余生といへど予定多々

浜木綿や沖へま向きし遭難碑

好き嫌ひ似てきし夫婦冷奴

水鉄砲爺の笑顔に命中す

佇めば頬撫ず野辺の青田風
刻を告ぐ魚版の音も梅雨じめり
万緑の峪の深さやかつら橋
碧天へ背くらべなす立葵
子燕の貌より大きき口開く

簾越し三味の音洩るる祇園かな
万緑に尖りし屋根はパン工房
下闇の延命水に行列す
満天の星へ紛れし恋螢
夏帽子風に飛びさう展望台

さくらんぼおちよぼ口して種を吐く

一灯に火蛾狂ほしき無人駅

ミサの鐘四方にこだます万緑裡

シテとワキ鳴き交はすごと墓

陽光を弾きて眩し樟若葉

金婚の妻に感謝し新茶汲む
嬰兒の大きな欠伸聖五月
卯波寄すテトラポットを鳴かせもし
若葉風色ある様な無いような
孕み鹿大和大路に迷ひをり

花筏かき分け進む屋形船

ロープウェイ花のお山を二分けす

仏壇の扉を全開す春障子

青空へ高梯子かけ剪定す

書淫の眼窓に見やれば春の雨

摩仁車止まる間のなき彼岸寺

さざ波に見え隠れする蘆の角

手庇に仰ぐ蒼天揚雲雀

川面はや一閃二閃初燕

浜風に乗りていかなご炊くにほひ

溪声の高鳴りて山覚めんとす
首尾問へば多分と笑顔大試験
残雪の山に舂すホルンかな
願ひ絵馬うち重なりて春を待つ
薄氷に透けて魚影の動きけり

老禰宜の妙なる笛や里神楽
寒行の読経漏れ来る杉木立
能舞の足の運びに淑気あり
去年今年跨ぎ八十路の峠越ゆ
金釘の癖字でわかる年賀状

山氣裂き神鼓訝す淑気かな

一願の柏手高く初詣

神鈴の鳴りやむ間なし初詣

黙々と指先忙し蟹せせる

数え日やデマに花咲く散髪屋

タンカーの影へと垂るる冬銀河
冬ざれの川に朽ちたる水漬き舟

蕪村の書なる襖絵を家宝とす

錫杖の列 肅々と 枯山路

枯蓮のうち伏して池昏れなんと

雪吊りの一本松の凜々しさよ

頑として寡黙決め込む懐手

水あやす如くに紙を漉きにけり

着膨れてゐてもお洒落はな忘れそ

枯菊の土に感謝の肥え加ふ

煤びかりせる梁やおでん酒

矢のごとく鳥影よぎる障子かな

席譲りあへば知己めくおでん酒

師を悼み句碑に集ひし冬帽子

木の葉髪訥弁なれど聞き上手

せせらぎに日の斑の躍る紅葉晴

古刹への裏参道の石路明かり

しぐるるや昼なほ暗き嵯峨の径

照紅葉天蓋なせる船屋形

浮寝鳥波間に揺れて池暮るる

落葉舞ふ耳朶の大きな石仏

朽ち舟の水漬く岸边や柳散る

ゆりかもめ大群連れて大漁旗

奥嵯峨の藪かけぬけて初時雨

秋寂ぶや前掛け古りし六地藏

沖遠く漁火せめぐ十三夜

なみなみとつがれし猪口に十三夜

朱の鳥居潜りて宮の秋を聞く

歳時記を座右としたる秋灯下

梵鐘に暮れ行く空や秋惜しむ

千仞の溪の奈落に紅葉燃ゆ
戦国の武者勢揃ひ菊人形
身に入むや目鼻の欠けし石仏
秋を聞く千年杉をうち仰ぎ
蒼天へ切り立つ嶺を鳥渡る

投句箱溢るるほどや小鳥来る

首塚のそびらの山に鴟猛る

爽やかや手話の会話の笑みもまた

写経場の静けさ破り鴟高音

新米の香りを放つむすびかな

秋灯下古りし歳時記座右とす

露けしや肩を寄せ合ふ無縁仏

萩の叢八重に二十重に枝垂れけり

蟲時雨庭の陶狸も聴くならむ

廃線の鉄路を隠す草の花

読書妻生返事する夜長かな
恙なく歩ける感謝お花畑
日を弾く綺羅の川波鮭のぼる
亀石はここよここよと昼の虫
愛犬が水先案内露の径

試食させられて買ひたる西瓜かな

駘蕩と流るる川や広島忌

鬼瓦強き西日を避けられず

常濡れの三和土涼しき魚市場

古文書の候文に紙魚はしる

温泉の街の川沿ひの道星涼し
夕焼けに染まる岬の白灯台
園児等の声のはじけるプールかな
佇つ吾の頬撫ず峡の青田風
百度石灼けて人影みあたらず

序破急と噴水の穂の力増す
遊舟の曲がりて景色一変す

雲の峰へと機首立てて飛機離陸

昏れなんとしてなほ白き花菖蒲

雲の峰見よやポパイの力瘤

万緑や祖谷の吊橋一步づつ
踏切を渡る田植機泥落とす
火の粉爆ぜ薪能いま佳境なる
溪流を竿一本の舟遊び
聖五月おちよぼ口して嬰欠伸

夏蚕食む命の音や小屋更くる

桜鯛魚拓に残し春惜しむ

春惜しむ枯山水に静心

水遁の術さながらに蝌蚪隠る

ネクタイの要らぬ余生の日々長閑

ぶらんこやベンチに二つランドセル

宿下駄で外湯めぐりす春の宵

振り向けば陸遠くなる浅蜷掘

菖蒲の芽風いなしゐる汀かな

陽炎のなかより電車近づき来

いかなご船吃水深く戻りけり

立ち上がる火が火を追ひて野火はしる

盆梅展主宰す和服美人かな

風韻を得んともとほる梅の園

笹鳴きの林に探すゴルフ球

錫杖の列肅肅と音冴ゆる

ごまめ噛む真面目一途の不退転

恙無き余生に感謝小豆粥

たこ焼き屋人垣つくる初恵比寿

去年今年八十路の夢を膨らます

炬燵部屋乱帙なるをな咎めそ
冬日燦障子を過ぎる鳥の影
息災の余生を感謝冬銀河
ありがたきご講話聴くも隙間風
船頭の舟唄もよし炬燵舟

ここだけの話に倦みし日向ぼこ
魚市場土間は常濡れ冬ぬくし
熱爛やあらぬ本音を聞く羽目に
亀石と化し甲羅干すし池小春
大根の青首畝をせりあがる

文樂の泣くに泣かされ秋の人
抱く猫とおしやべり交はす縁小春
裏鬼門花柊のこぼれをり
道の駅葉つき大根大人気
妻に多謝長寿に感謝文化の日

梵鐘の余韻
嫋々秋深し

千枚の棚田は
いまし豊の秋

内海の一島
しるき蜜柑色

大阿蘇の夕陽に
染まる芒かな

菩提寺の大門
開く秋彼岸

小説を一気読みせる夜長かな

鳥渡る寿永の悲話の海越えて

秋風裡文楽人形肩で泣く

書に倦みて蟲の音に耳澄ましけり

惨状に祈るほかなし秋出水

干されたる漁網の匂ふ秋の浜
秋風に肩寄せあへる羅漢かな
味噌汁の熱きが美味し避暑の宿
語り部に耳かたぶけよ広島忌
明日咲くとみし朝顔のほぐれかな

カレー臭漂ひくるはキャンプ村
万緑を砦としたる古墳かな
山椒魚岩に紛れて身じろがず
はまなすの咲き満つところ海難碑
ボーナスに縁無き暮らし冷奴

風鈴の上機嫌なる峠茶屋

シテとワキ心得て墓なきにけり

通勤のたびに確かむ燕の子なつき

昼網の大漁に立つ活気かな

大人びし娘眩しき更衣

メイシツク払拭せよと空晴るる

バスの旅どの道ゆきも麦の秋

起伏なす麦秋の丘夕陽落つ

潮満ちて陸遠くなる潮干狩

春昼や妻の鼻歌階下より

村なべて同じ苗字や桃の花

囀や静まり返る座禅堂

長き足もてあましたる花筵

度があはぬとて眼鏡拭く蜃気楼

陽炎へる停泊マスト犇めきて

讚美歌の洩るるチャペルに風光る

春雨や傘もささずに百度踏む

渦潮をまたぐ大橋鳥帰る

農道の轍ぐちやくちや春の泥

大いなる雨の珠抱くいぬふぐり

日向猫四肢を伸ばせり春隣
日脚伸ぶ電波時計に狂ひなし
野水仙岬の風の吹き上げ来
襖絵の虎の眼光淑気満つ
神杉の辺りを払ふ淑気かな

賜りし長寿に感謝初御空

寝顔の子サンタクロース疑はず

ちやんちやんこ法衣を脱げば好々爺

おでん酒意気投合し相識らず

一舟を舫ひ水郷冬ざるる

差し向かひ本音の洩るる炬燵かな
道の駅葉つき大根山と積む
寒禽の鋭声こだます神の森
大根の青首畝をせりあがる
朝練の部活の子らの息白し

谷戸の軒レースのごとく大根干す

賓頭廬を撫でて一願木の葉髪

余生得てほ匂に親しむ文化の日

秋霖に涙目となる街路灯

裏鬼門花ひひらぎの匂ひけり

赤い羽根胸豊かなる一少女
石塊と見たるは仏草紅葉
上皇の遠流の島や木の実落つ
草原の古墳に佇てば秋の声
露座仏に一茎手向く野菊かな

月光に屏風立ちせる四囲の嶺々

草紅葉路傍の石は道標

石塊と見たるは仏草紅葉

歳時記を座右としたる夜長かな

月光に濡れたる路地を通夜帰り

月光が抱擁したる夫婦岩
あるなしの風に騒ぎて竹の春
星月夜光年の距離思ひけり
渦潮に揉まるる釣瓶落としの日
芒野に見え隠れする園児帽

生身魂昭和を熱く語りけり

正座して須臾に読経や盆の僧

里山の夕日かきまぜ赤とんぼ

雲海を抽ん出て富士高きかな

赤き屋根多きこの町カンナ燃ゆ

部屋の灯に玉砕せんと金亀子
縄暖簾ナイター帰り族で混む
水鉄砲出会ひ頭に打たれけり
と見る間に舟虫四散して失せる
時差ぼけを悟られまじとサングラス

夏草に隠れて傾ぐ売地札

鎮守杜を要としたる青田かな

竿自慢して賑々し鮎の宿

ゆくりなく余花に出会ひし峠道

麦秋を分けて一輛電車ゆく

木洩れ日のおどるせせらぎ新樹光

余生得て感謝の日々や更衣

トンネルを抜ければ若葉明りかな

奥嵯峨の風騒がしき竹の秋

藤房に手の届きけり車椅子

囀れる磨崖仏の寧かれと

綿菓子のごと蒼天の春の雲

街灯の涙目となる朧かな

八十路吾もちよつとお洒落の春帽子

冗談にしらけたる座や四月馬鹿

宵闇にひろがる花の白さかな
傘立てに杖二三本彼岸寺
池の面に遊ぶ雲あり葦の角
陽炎ひて白線歪む野球場
碧天の風に乗りたる揚雲雀

黄水仙灯台の立つ岬鼻

春眠し理髪鏡にテレビ逆

春の山駱駝のこぶに似たりけり

大の字に寝ころべば草芳しき

斯く老いて苔むす幹の芽吹きけり

胎動といふことばあり青き踏む

春兆す潮入り川の匂ひけり

道の駅最前列に露の臺

橋脚の折れよと激つ雪解川

輝の手の甲に静脈浮き上がる

寒肥のスコップ阻む太根かな

寒明けて八十路の箍を締め直す

静寂のつつみて鎮む雪浄土

神域に神鼓高鳴る四温晴

広鉢の白砂を割りて福寿草

足下なる潮騒を聞く水仙郷
大蛇めく巖にしぶく冬の濤
明けの空われがちに翔つ初雀
切つ先の瑞々しさよ竹飾り
節くれの仁王の足へ冬日射す

湯豆腐の味を問はるる京言葉

茶柱の立ちて佳き日や一茶の忌

無駄力抜けて余生のちやんちやんこ

饒舌と仏頂面の日向ぼこ

朝市の売手買手と息白し

碁 敵 の 沈 思 黙 考 懷 手

ゆりかも引き連れ戻る大漁旗

底冷のうぐいす張りの廊巡る

紙漉きの水より暮るる名塩かな

鰯起こしテトラポットを呑む怒涛

法話聴く広き本堂隙間風
鉛色に水錆びて蓮枯れにけり
耳遠く身ぶり手ぶりや日向ぼこ
散歩する主も犬も息白し
晩年の余白むさぼる日向ぼこ

老吾を相哀れむか枯蠟螂
夕帷払ひて白し花八つ手
軒高く積まれし薪や冬構
肅々として銀杏散る御堂筋
仁王像泰然自若寒風裡

木の実降る野点の宴も隔てなく

竹林の俄に翳り嵯峨時雨

コーヒーの熱きを所望秋の人

明日香路雲たずさへて十三夜

末枯るる豪族どもの墓どころ

満ち足りし余生の秋を惜しみけり

捨てられし案山子存問する雀

身に入むや電柱に貼る尋ね猫

秋祭男冥利の陣太鼓

運動会貴賓テントに杖並ぶ

鴟猛りパターの手元狂ひけり
落し水聞ききて農夫の至福時
武将みな同じ彩なる菊衣
蟲浄土古墳の埴輪並びけり
大阪弁憚るなかれ西鶴忌

鹿跳ねて角切りの勢子息荒し
と見る間に下界隠るる山の霧
波の綺羅揺らぐ川底秋澄める
蓑虫の糸一本の宇宙かな
露ふふむ朝とれ野菜無人店

西瓜切る正座の子らが侍りけり
ひしめきて繫船揺るる葉月潮
晚鐘の嶺々に舂す古都の秋
墓洗ふ風樹の嘆を詫びもして
水たつぷり話しかけもし墓洗ふ

水を乞ふムンクの叫び原爆忌
朝顔の明日咲く蕾かと思ふ
月の出に合掌したる生身魂
洋館の白壁を背にカンナ燃ゆ
溪流に透けて走るは鮎の影

朝顔の明日咲く蕾数へもす
思ひ出を知る片減りの登山靴
放牧の草食む牛馬雲の峰
句碑巡る吾を洗礼す蝉時雨
足跡を消すは渚の青葉潮

月涼し椰子葉影の砂浜に
千枚を駈けめぐりをる青田風
滝壺の渦抜けてより水寧し
水昏れてより艶めける花菖蒲
水底に砂躍りをる泉かな

川風を仕切る貴船の青簾
豪商の栄華の名残夏座敷
万緑の底ひの水琴窟を聴く
夏帽に妻十歳は若返り
清貧を知れとどくだみ咲き満つる

一雨に艶を深めし若楓
恙なく歩ける至福若葉風
夏雲を脱ぎて金環日食現る
新緑の山ニ夕分けす高速道
ウインドのマネキンもまた更衣

トンネルの出口を覆ふ若葉影

マリア像祈り佇む新樹影

昏れてなほ花菜明りの無人駅

轉りに朝のカーテン繰りにけり

墨絵めく古刹の山や鐘朧

囀のシャワー浴びる車椅子
いななきの連鎖反応春の牧
一陣の風に錐揉む落花かな
一面の菜の花畑に大水車
花屑を吐き出し回る水車かな

漆黒の闇に夜桜の咲き満てり

大楠は森さながらに百千鳥

百千鳥小さき祠に鈴一つ

天恵の風授かりて鳥帰る

須磨訪へば寿永の悲話の沖霞む

バードナビあるかに雁の帰りけり

春耕の土くれ匂ふ日差しかな

友逝きし西方の空鳥雲に

観梅や足下にひかる茅渟の海

居酒屋の人気メニューは露の臺

下萌をスキップでくる女の子
観音の翳す指先凍て返る
剣山のごと松葉立つ薄氷
沖遠く漁火一つ冴返る
村人ら総出に見守る野焼きかな

瀬音いま春の調べと覚へけり
沖よりの尖りくる波寒厳し
瀧音に消ゆる経声寒行者
深雪積み過疎の一村眠るごと
寒月や路地横切るは猫の影

断崖の怒涛がしぶく水仙郷

吾が句集推敲重ね去年今年

球足の綾なす霜のグリーンかな

積読の嵩なす机辺去年今年

大漁旗追ひて群舞すゆりかもめ

霜ふりの朝採れ野菜無人店

風花す五百羅漢の福耳に

柚子風呂に瞑想せるが我が至福

雪吊りの男結びに気迫あり

過ぎし事肚に納めてちやんちやんこ

師の一語励みとしたる事始
神庭に焚く櫓の灰白きかな
好日の野点に紅葉散りやまず
梵鐘の余韻嫋々山眠る
岩を打つ波の飛沫や冬の月

一点を睨みし鋭目や檻の鷹

青首を掴みて一気大根抜く

嵯峨小春と行き斯くゆく人力車

無位無冠なれど健康文化の日

炉を開く茶室に匂ふ青畳

塔見えて大本山の紅葉濃し

枯山水灰と色づく初時雨

杣の径ここだ木の実のうち敷きて

吊り橋を揺らせゆらせて秋惜しむ

吊り橋のぐらり傾く紅葉峡

ボールペンインク切れなる秋思かな

人影のなきログハウス小鳥来る

秋時雨万象色を深めけり

赤い羽根黄色き声が合唱す

散らばつて牧馬の肥ゆる草千里

日と土の匂ひを放つ捨案山子

突風に脅されて散る稲雀

農継がぬ子が率先し稲を刈る

一山を揺らして風の芒原

爽やかや出迎え人の島訛

我が前に揺れうしろにも秋桜

蠅螂の前脚パントマイムめく

我が影のつきて離れぬ月の道

鰯雲沖の巨艦の動かざる

水底に日の綺羅揺るる瀬々の秋

山霧に見えては隠る下界かな
裸婦像の全身濡るる月今宵
この良夜万葉びとを想ひけり
蕎麦の花北の大地の地平まで
霧の山尾灯頼みの九十九折

さりげなく欠伸を隠す秋扇
分け入りて句碑に見ゆる萩葎
産声に歓声上がる望の夜
みちのくに戻る活気や秋刀魚糴
腰曲がる老婆が仕切る地蔵盆

新涼や舟沈むかに大漁旗

ひぐらしや供花なき少年兵の墓

馴れぬ手で赤子受け取る生身魂

白内障癒えたる今宵星月夜

書に倦みて窓開け放つ夜の秋

桐一葉同窓名簿朱線ひく

酢醬油派蜜派と分かれ心太

サーファーの波に消えては現るる

遠雷の魁け雨の匂ひけり

嘶家の扇子の所作にどつと沸く

琉金のフリルひるがせ舞ひにけり

尾瀬沼の木道に立つ雲の峰

この山の鼓動のごとく苔清水

砂浜に裸足投げ出す椰子の陰

メロデイに渡る信号風薫る

墓咽喉は早鐘うちにけり

梅雨空に墨絵ぼかしよ嵐山

熟考の上の一と蹴羽抜鶏

定例句会入選句

春愁や水子地蔵に供華溢れ
安産のお礼を納む梅日和
磊々をあらふ清流風光る
嬰の笑み百面相や家の春
杖つけど口は達者や老の春

小豆粥俳句長者を願ひけり

冬鳥の極楽浄土なる寺苑

一穢なき空へ万朶や冬木の芽

ほ句の秋句材求めて万歩計

園めぐるとの径行くも木の実路

蹲居に木賊の影の揺れやまず

一望の夕日輝く蕎麦の花

大滝のマイナスイオン深呼吸

山峡を縫ひ七曲りバス涼し

緑化園奥へ奥へと青葉満つ

園めぐるとの径も草芳しき

適適と春の雨音くさり樋

聖塔の余寒の空へ尖りけり

庭覆ひ火のごとく燃ゆ紅葉かな

さながらに炎の坩堝谷紅葉

大樹あり巨石のありて庭ぬくし
重さうに雨粒やどすしだれ萩
夫婦句碑連理となりて萩浄土
本物のヨットを飾るレストラン
帆柱の白直立す波止涼し

梵鐘をひと撞き暑気を祓ひけり

竹皮を脱ぎ散らしたる藪小径

車椅子寄せてバラの香愛でにけり

若葉洩る陽の洗礼や古墳道

大岩を抱擁したる山つつじ

碧天に万紅散らす山つつじ
園児らの列へと春の落葉かな
香を競ふやに紅白の沈丁花
老幹の梅に勇気をもらひけり
供花はみな春の色なる水子仏

磴百段上りきつたる息白し

名苑の辞するに惜しき冬紅葉

四阿の固き木椅子や冬ざるる

嵩なしてせせらぎを塞く落葉かな

走り根にな躓きそ落葉径

天辺に彩づく紅葉砂防ダム

みころもに露したたりぬ磨崖仏

池の面駈けてはもどる秋の風

筒抜けの原爆ドーム翳雲

秋暑しバスの隣席太鼓腹

水墨の一幅めきて滝涼し

日の匂ふ地産のトマトまるがじり

走り根に褥と積みし夏落葉

さながらに寂光浄土蓮の池

梅雨の滝古き祠にしぶきけり

若楓覆ふ奈落の瀬音かな

昨夜雨に高鳴る瀬音若楓

若葉愛で立ち去りがたき茶庭かな

繚乱の百花に園の春惜しむ

水草生ふ鯉悠々と影連れて

つばくらめ一閃二閃空ま青

ぜんざいを食べておしやべり女正月

寒日向揃ひ踏みする宮の鳩

極月や路地に溢るる見切品

餓鬼大将いま好々爺日向ぼこ

風遊ぶ音の序破急竹の春

黄昏の鷄頭いよよ妖氣満つ

秋の蝶樹間隠れに消えにけり

枯蠟螂落武者然と構へけり

万緑を二た分けしたる一瀑布

掬ひ飲む延命水に汗ひきぬ

女子会の意気軒昂やビアホール

吹く風に火の粉高舞ふ薪能

千尋の谿へなだるる若楓

春の鴨仲良く尻を振りにけり

春光に輝く九輪仰ぎけり
吾を睨む天井の龍淑気あり
初夢にみし姑の機嫌よし
常盤木の古墳を抱きて山眠る
暖房の床屋の椅子にまどろみぬ

老かこつ吾を一喝冬の雷

磊磊の瀬を過ぎてより水澄める

左見右見薬草園の花とりどり

澄む水に魚影日の斑をまき散らし

と見る間に霧に失せたる千枚田

草野球回し呑みする麦茶かな

雨垂れの調べまたよし夏座敷

若楓コートに響くラリー音

たゆたへるペットボトルや春の川

ホバリングしてをる虻や春花壇

花の昼窓から洩るる聖歌かな

美しく老いたしと思ふ福寿草

初空へ前肢上ぐる神馬像

満面の笑みを添へたり福娘

一門の墓どころらし笹子鳴く

身じろがぬ檻の大鷹威厳あり

たあいなきことが幸なり古日記

檻の鷹大空にらみまばたかず

廃線の鉄路を隠す枯芒

白障子過るは庭の鳥の影

幸あらんとて拾ひたる木の実かな

中空へ丈余のすすき揺れやまず

風鈴の音に反応す猫の耳

今日一ト日無事を謝しつつ夕端居

風に舞ひ夕陽を散らす赤とんぼ

夕焼を掬ひ掬ひて観覧車
滴りや顔に苔むす磨崖仏
碑の梵字をなぞる蜥蜴かな
右見左見梅の香に磴のぼる
法の日を集め山茱萸黄を点す

梅が枝に透けてはるけき甲山

春光の空に煌めく九輪塔

笹鳴きのときれときれや杣の径

寄せ植えの白砂を分けて福寿草

幾万の水仙揺らす磯の風

ポンコツの山と積まるる枯野かな

群青の空悠然と鷹高し

大鷲の空傾けて急降下

菊花展裏にバケツと杓覗く

霧襖晴れて展けし千枚田

殉教の島に燃えゐる曼珠沙華
似て似ざる五百羅漢の秋思顔
風一陣わたる夕日の芒原
横文字の通用門は薔薇アーチ
水の嵩瀬音で判る滝の道

風鐸の揺れて落花のとどまらず

雨だれは和音のリズム春庇

春憂ふどころではなし地震巨大

この貌のどこにあの声猫の夫

大雪に眠る一村無音界

マネキンは素足見せそめ日脚伸ぶ

虎落笛猫の奇声もその中に

日出度さの土くれつけて福寿草

話したきことの山程盆の月

新涼や飛沫窓うつ高速艇

夕焼けを咀嚼してゐる牧の牛

饒舌も寡黙もありて川床に酔ふ

空の底抜けたるごとく大夕立

水馬ぶつかりさうでぶつからず

蜘蛛の罫に設計図なし幾何模様

吊橋の揺れて万緑傾ぎけり
昼寝覚小さな欠伸乳匂ふ
老鶯の正調朗々谷こだま
聞えくる婚の賛美歌窓若葉
聞えくる婚の賛美歌窓若葉

現し世を駈けて今ある花の下

春岬馬柵に寄り添ふ母子馬

目を皿にして露の臺探しけり

さくさくとリズム生まれて水菜切る

梅東風に踊りづめなる恋の絵馬

お年玉喜ぶ顔に悦こべり

初日の出波金鱗の夫婦岩

吟行句会入選句

潮の色こぼして鯨の糶られけり

花舗占めてポインセチアの鉢並ぶ

寒禽の鋭声訝す茶白山

異次元の景さながらに蓮枯るる

観音の翳す千手に冬日燦

腰曲げて毬栗拾ふ媪かな

炎めくダリアあたりを圧倒す

花の寺俳人として逍遙す

木々芽吹く古刹の庭に鬼瓦

鴨をかし我もわれもと逆立す

自ずから芽立ちの遅速池めぐる

琴坂のせゝらぎを聞く秋意かな

川風に伏し止まざりし枯芒

磴一步一步に愛でる散紅葉

説法は馬耳東風と紅葉愛づ

春光に羽広げたる白孔雀

賀茂川の堰煌めける水の秋

大原や秋さぶ庭を去りがたく

爽やかや水琴窟に耳至福

露けしやわらべ地蔵は苔まみれ

梅雨晴間 仏足石の指に水

紫の唇のゆるみし花菖蒲

女郎塚よぎりて進む蟻の道

つまづきててんやわんやの木下闇

雨の珠溜めて煌く日の牡丹

白牡丹無垢を極めて一穢なし

山門を凌ぐ大樹の樟若葉

いと小さき祠や庭の春陰に

大川の滔々としてビル霞む

小春の日瑞雲橋の擬宝珠に

レトロなる時計の音や秋灯下

宮うらら英語韓語の絵馬混じる

風の萩乱れに乱れ磴隠す

森林浴涼し疏水の楽もまた

展望台足下を埋む若楓

子宝を願ふ一途や東風の絵馬
寺の樹々艶増す今日の緑雨かな
法の山眼の洗はるる若葉かな
園児らの黄色き声や草萌ゆる
句碑歌碑を訪ねゆく径初音聴く

秋桜鳥語に応へ揺れにけり
見晴るかす群青の海秋日燦
草の花古墳の口を彩りぬ
鏡池渡る風あり水の秋
万緑を砦としたる城址かな

大滝の裳裾ひろげて落ちにけり
うららかや雑事を忘れ吟行す
呵呵大笑するが如くに大手毬
梅東風にさざ波遊ぶ池の面
鳥語降り浄土となりし梅の苑

パレットの彩とりどりに梅描く

水亭の金繡紅葉揺れやまず

捻じくれる太き走り根落葉道

走り根になつまづきそ秋惜しむ

小鳥来る四ヶ国語の注意札

翳雲金の鯨泳ぎをり

噴水に見とれて句帳濡らしけり

掘痕の荒きをなぞり春惜しむ

置物に栄華を想ふ春山家

春陰に鎮もる村の古祠

朱の揺れて千本鳥居陽炎へり
恋の絵馬達筆なりし梅二月
涅槃図を拝む顔みな畏まる
天を突く銀杏黄葉の眩しけり
鶏頭は孤高の紅を極めけり

くつきりと棚田耀く月今宵

月白や万葉人の詠みし丘

亀石を撫でて明日香の秋惜しむ

秋の蝶ついと消えたる草葎

豊の秋ひろがる中に飛鳥寺

石舞台そびらに歩む秋日傘

乱れ萩展望台の径狭む

神宮の神鼓の音や新松子

あめんぼう己の影とあそびけり

一水に黄を散らしけり濃山吹

菜の花黄賀茂の河原を埋めけり
狛犬の鼻こそばゆし黄砂降る
茎立てる空に引力ある如く
至福とは無我の境なる日向ぼこ
一湾に漁火一つ冴えにけり

地
図
ひ
ろ
げ
旅
行
プ
ラ
ン
や
春
隣

昨
夜
の
雨
雫
耀
よ
ふ
紅
葉
か
な

懐
に
大
仏
抱
き
山
眠
る

庭
園
を
貫
く
水
の
澄
め
り
け
り

爽
や
か
や
山
気
裂
き
ゆ
く
ケ
ー
ブ
ル
カ
ー

太鼓打つごと夕立の屋根ひびく
息切らせ雄滝雌滝とめぐりけり
御所桜今日の至福と愛でにけり
雪解水命得しごとたばしれる
砂吐きて浅蜷の舌ののびにけり

仏壇の灯暗き余寒かな

碧天にひかり撒くごと銀杏散る

大樟の空一穢なく秋高し

書に倦みて一息入るる月の窓

蝸螂の所作はパントマイムかな

超高層ビルより高く雲の峰

遊歩道鳥語を零す合歡の花

琴坂のせせらぎの音に春惜しむ

春愁や城趾の井戸に土詰まる

仁王像開く指先春の塵

雨含み芽吹き初めたる古梅かな

蠟梅は黄の雨雫こぼしけり

句碑訪ね由緒を巡る菊日和

襖絵の虎の眼光冷まじき

謎めきぬ古墳のいはれ小鳥来る

岩 走 る 曲 水 の 音 涼 新 た
墨 絵 め く 金 剛 の 嶺 々 雁 の 秋
急 坂 の 磴 半 ば な る 蝉 時 雨
蓮 の 池 白 鷺 一 羽 身 じ ろ が ず
目 鼻 な き 石 仏 群 に 蝉 時 雨